

原著

障害児の「聖化」

—福子の思想—

相澤 譲治

神戸学院大学

総合リハビリテーション学部

社会リハビリテーション学科

【要約】知的障害の子どもを「福子」、「福虫」、「福助」、「宝子」と称して大切に育てる伝承がある。地域におけるひとつの伝承である。そして、知的障害をともなう子どもは、神の子とされ、しあわせをもたらすとの言い伝えもある。現代では、ほとんど信じられていない伝承であるが、民俗学的に研究課題とされている。本稿では、社会福祉の視点を考慮しながら障害児が「聖化」としてとらえられていく過程を社会的状況と関連させながら論述する。

とくに明治時代の不安な状況下の社会において、一人の知的をともなう障害児が「福子」として「聖化」されていくことを論じる。

本論では、先行研究を踏まえながら、「異人」としての障害児を分析し、具体的事例として実在した人物「仙台四郎」に対する障害児観を考察することを目的とする。

キーワード：福子 伝承 異人 障害児 仙台四郎

1、福神、異人

福神といえば、七福神を連想する。福神とは、宮田登によると「室町時代の都市文化のなかから誕生した福神信仰の一形態として、江戸・京都・大阪などの三都を中心に発展した日本的スタイルをもつ民間信仰」である [1]。

身体的に障害をもっている神仏を「不具神」と総称する研究もある。『日本民俗宗教辞典』（1998）によると、「天目一箇神（鍛冶屋の祖神・ひとつ目）、エビス神（生産神、福神・盲、ろう、骨なし、成施、両性具有、左利きほか）、山の神（生産神、盲目）、便所神（産神・盲目、手がない）、竈神（火の神、台所の神・器量が悪い）、荒神（火の神、台所の神・盲目、聾、啞の三重苦を負った神）、大師（来訪神・一本足）」を不具神としてあ

げられている。これらは、不具神であるとともに幸福をもたらす神仏でもある。

恵比寿、大宝も広い意味で福子である。

また、小松和彦によると異人とは、「社会集団との関係のなかに立ち現われてくる」[2]と述べる。また、「異人は社会のさまざまな局面、すなわちさまざまな社会集団の（外部）に立ち現われる関係概念」であると説明する。[3]異人は、関係性の中で異なる人かどうかが判断される。

この異人には、次のように4つのタイプがある。

- ① ある共同体に一時的に滞在するが、所用をすませばすぐに共同体を立って去っていく異人
- ② 共同体の外部から共同体にやってきて、そこに定着するようになった異人
- ③ 共同体がその内部から特定の成員を差別・排除する形で生まれてくる異人

④ 空間的にはるか彼方に存在しているため間接的にしか知らない、したがって、想像のなかで関係を結んでいるにすぎない異人 [4]

いわば、障害児は③のカテゴリーに入る。とくに知的障害をもつ子どもや成人がとる言動の中には、われわれと異なる「非日常性」がある。そして、われわれと異なる「時間の流れ」がある。本人が発することばと場や動き(空間の動作)には、一般の人に理解しがたい面がある。そのことが空間的に「異界」に存在するものとして、もしくは「異界の入り口」にいるのではないかと想定されるのである [5]。

ところで、我が国に歴史的に障害者はどのようにとらえられていたものであろうか。

新村拓は、「古代、中世社会においては、障害者は共同体の外に追い払われていた。それは、障害者が罪を犯した者であること、さらに、障害者が発すると考えられていた災気(のちには穢れとなる)から共同体を守り、秩序と安定を願うということが、その行為の正当性を与える論理であった」と指摘する。[6]

異なる言動のために穢れ、不浄、災いをもつものとしてとらえられていたのである。障害者は、「異界の人」であり、それゆえに共同体はみずから手をくさすことなく「水に流す」ことによって障害者の存在を抹消していたのである。

このように、障害者を異人ととらえた場合には否定的にとらえる立場、すなわち異人であることで共同体から疎外、排除される存在とみる視点がある。多くの障害者の場合、この視点で差別や排除されてきた歴史的経緯がある。一方、異人に積極的な意味を見出す視点も存在する。本稿の主題である「福子」の場合は、社会との関係性の中で排除されるのではなく、「福神」として社会的包含されていた場合である。「福子」は、特定の社会集団にあって、社会集団とともに生活できた。それも、「福神」として大切にされた障害者が現実

に存在したのである。

2、福子の伝承

柳田国男による日本各地の民俗学的資料収集のなかで、次のような伝承が紹介されている。

「北陸処々の海岸地方では、村の白痴を大事にする風習が近い頃まであった。その理由はこの者が死ぬと鯨に生まれ替って、浜に寄ってきて村を富ませてくれるものと信じていたからだそうである」[7]

現代の表現では、知的、それも重度の知恵遅れのこどもの死が貧しい村社会に富をもたらすとの伝承である。柳田が「福子」自体の表現を用いたのは、高田十郎が書いた『随筆民話』(1943)の中で、高田が次のような報告したことに対するコメントが初出である。高田は、神戸での伝承を次のように紹介している。

「不具が生まれて繁盛した店

神戸のある下駄屋に、一人の子供が生まれた。相当な年になっても、言葉がハッキリ分からない。其からだも頭ばかりムヤミに大きくて、足が立たない。ところが、それほどでもなかつた店が、其子がカタワとわかつた頃から、妙によくはやりだして、昭和一四年頃には界限でも評判の店となつたのである。又、神戸の或肉屋は、これも初めは一向言ふほどの事もなかつたのに、その後急に繁盛して、評判になつた。それは其家の一人ある娘が、よるになると牛になる、そんな秘密が沸いてきた為だとの噂である。」[8]

高田の文章には、福子の表現はでてこないが、柳田は次のように述べている。

「フク子と称して白痴者の生まれることを、家繁盛の瑞相と見る風習、是も大坂には二三の例のあつたことを聴いて居るが、どこから運んで来たものか、神戸のやうな新開の市に有るとい

ことは、特別の事情が考へられる。少なくとも単なる古い惰性の名残りとは言ひ得ず、是からの実験でも可能なのである。」[9]

この「福子」の記述を柳田は、ここではじめて使っている。

柳田の「たくらた考」は1940年刊行であるが、高田の文章へのコメントは1943年の執筆である。

「福子」自体の研究は、民俗学の範疇に属する。社会福祉の視点から「福子」を考察した研究は近年、ほとんど散見しない。

そこで、「福子」をとりあげた福祉の研究を分析しながら、「福子」自体の位置を民俗学の研究をふまえて考察する。

「福子」の伝承とは、心身になんらかの障害をもって生まれた子どもが、その家に富や幸福をもたらしてくれるということで大切に育てられる言い伝えのことである。

いわば、福祉民俗学の視点で「福子」を研究対象として考察したのが大野智也と芝正夫の『福子の伝承』である。それ以前においては、障害者(当時の表現でいえば、「不具」、「白痴」)に関する伝承が「不具神」との関係において、また地域の風習の一つとしてとりあげられている。

『福子の伝承』は、日本各地で障害児をどのように呼称していたのかに関してアンケート調査を実施し、その集計と分析が中心の研究である[10]。障害児に対する呼び方は、地域によって「福子」、「宝子」、「福虫」、「福助」、「宝物」、「お宝さま」などがあげられている。そして、各地の伝承を次のように紹介している [11]。

- ・小児マヒ児を持った家庭があり、福子が生まれたので、家が栄えるといって、たいへん大事に育てていた。その子が一人前になるまでいていたと思う。(広島)
- ・フクゴといい、障害児が生まれた場合、その子が生まれたので、家が栄えてお金ができたという。フクゴは非常に背丈が小さく、知能

が劣っている。その子が亡くなるまでいっていたようだ。大正末頃、近所の人から聞いた話である。(香川)

- ・なにかの障害を背負って生まれた人を宝子という。私の家に軽度の精薄児が生まれた時、父は「これは、宝子といって、この子を大切に育てると、きっと家は繁盛するのだから、みんなで大切に育てなさい」と教えました。このことは今でもあちらこちらでいわれています。(長崎)

その後、坪郷康は、『福子の伝承』に触発されて、全日本精神薄弱者育成会(現、日本知的障害者福祉協会)の協力のもと「福子の伝承」の発掘をおこなっている。坪郷によると、「福子(ふくこ、フクコ)」、「福助」、「宝子」、「授子(サズカリコ)」、「福娘」、「神様」の伝承があったと報告されている [12]。

以上の研究にあるように、障害児は幸せをもたらす「福子」とされていた。

しかし、障害児は幸せをもたらす存在であったり、反対に「鬼子」であったりする両義性がある。民俗社会の中で、障害児が生きている家自体、地域社会との関係によって両義性をもつ。とくに、出生した家の経済状態によって左右した。富んだ家の場合、障害児が生まれても育てていける経済があったからである。

それでは、どうして障害児が「福子」とされたのか。その答えを導くのが障害児をめぐる信仰である。

小松は、「『異常』と考えた身体的、精神的な特徴の発生の原因を昔の人たちは、人間世界の向こう側、つまり異界に求めた。異界には人間に対して好意を抱いていた善霊と悪意を抱いている悪霊がいると考えられていた。」と述べている。そして、「神霊が特定の家や村落を裕福にするために与えてくれた『異常児』が『福子』である」[13]。また、「そのような子(引用者注—障害児のこと)

を大事にそだてることができる自信と勇気、あるいは経済的に余裕がある者が、その子を『福子』として迎え入れることができたのであった」[14]。

反対に経済的に余裕ない場合は、障害児を排除すること、つまり典型的には「間引き」されていたのである。

このように、家自体に不幸をもたらす好ましくない子どもは、「鬼子」、「河童の子」、「化け物の子」、「魔物の子」などと呼ばれていた。

また、「福子」は、「異常児群の一角を占める子どもで、福をもたらす子どもとか考えられていた『異常児』である」と小松は、明言している[15]。「想像のなかの異人、神が投影された異人」が「福子」であり、集団の活力源とみなされたのが異人である」[16]。

片目、片耳、片足の子が登場する昔話があるが、これらは障害児である。この半分人間のイメージは、「神にさずけられた子どもであること、すなわち、その子どもは半分は人間界に半分は異界に属している子どもであることを象徴的に物語っている」のである[17]。

半分は人間界、半分は異界に足をおく両義性の存在なのである。しかし、知的障害の場合はどうであろうか。知的に障害がある場合は、その理解不能な言動ゆえに異界に属する子どもととらえられていたのだろう。そのために、排除されたり、あるいは(ときには)畏怖の対象ととらえられていたのである。

3、「福子」としての仙台四郎

仙台四郎は、明治時代、仙台に存命した知恵遅れの男性である。「しろばか(四郎馬鹿)」とも呼ばれていた。本名は、芳賀四郎である。47歳で福島において亡くなっている(異説がある)。

仙台四郎の写真や肖像画をお店に飾っておくと、商売が繁盛するということが現在でもとくに

仙台のお店では多く見かける。現在、仙台四郎グッズをネットで購入することができるので、仙台以外でも複製の写真などを飾っているお店も散見できる。

写真の活用、普及や複製が仙台四郎を「福子」化への浸透を強化したものと考えられる。「明治」という時代背景による写真という存在が民衆のなかにも浸透してきた社会の中の「福子」化の典型事例が仙台四郎であるといえる。この点については、後述する。

参考までに、仙台の地元の人たちを紹介している『仙台人名大辞典』(歴史図書社、1974)によると、仙台四郎は、以下のように述べられている。「四郎 白痴。四郎馬鹿を似て其名四方に著れる。仙台北一番町鉄砲師芳賀某の子なり。其家 火の見櫓の下にあるを似て櫓下四郎と呼ばれる。性疾愚東西黑白を弁ぜざれども好奇者の愛隣を受くる四郎の如き蓋し稀なり。明治三五年頃、四十七歳にて福島県須賀川にて死せりと云う。」

上記のこの紹介文にあるように、四郎の父は鉄砲鍛冶職であり、その四男として出生したため四郎と名付けられる。戊辰戦争(1866年 慶応4年 明治1年)の影響で鉄砲の注文が多く、家自体は裕福であったことである。父42歳の子どもである。3歳までは、女の子として育てられ、4歳ではじめて男の子として育てられた。なぜなら、二男、三男があいついで出生後、すぐに亡くなり、親としては「神様が、男の子を欲しがって、天国に連れていってしまう」と考え、「女の子として育てよう」としたのである。明治時代といえども、伝承、言い伝えは育児の際にはとくに信じられていたのだろう。後述するが、男の子なのに、最初は女の子として育てられたことも「福子」となる要因のひとつとされている。

四郎が5歳の時、「神隠し」のように一時期行方不明となる。そして、7歳のとき、仙台広瀬川での花火大会のときにあやまって川に落ち、川下

で助けられる。このときに、呼吸停止して、7日目に意識がもどる。脳に酸素がいかなかったことで、知能が低下したといわれる。

そして、8歳から町中をうろうろするようになった。彼は、「バヤン、バヤン」としゃべり、いつも笑顔である。そうして、10歳ころから彼が立ち寄る店は繁盛するという噂が広がっていく。彼は、人気者となり電車も無賃で乗れるようになっている。

小説家岡本かの子は、「みちのく」という短編のなかで、この仙台四郎を描いている。1928年9月に雑誌「雄弁」に発表されたもので、原題は「みちのく（四郎馬鹿）」である。

岡本が仙台での講演に訪れた際に、地元の写真館に展示された「四郎馬鹿」の写真に気づく。そして、地元の人から説明を聞いた内容が、この短編である。岡本は、次のように紹介している。

「少年は、見当たり次第の商家の前に来て、その辺にある箒を持って店先を掃くのである。その必要のある季節には綺麗に水を撒くのである。そうしたあと、少年はにこにこ店の前に立って何かを待つ様子である。

始めは何事か判らなかった店の者は余計なことをすると思って、少年の所作を途中で妨げたり、店先に立つ段になると叱って追い払ったりしていた。少年は情けない顔をして逃げ去る。ときどきは心ない下男に打たれて泣き喚きながら走ったりする。（中略）

少年は銭も受け取らなかった。銭は貰ったこともあるが、大概忘れて紛失するので懲りたらしい。「あれは、どこか素性のいい家に生まれた白痴なのだ」「そういえば、上品だ」

町の人々は、少年自身が僅かに記憶している四郎という名を聞き取って四郎馬鹿さんと愛称をもって呼ぶようになった。「四郎馬鹿さんに見舞われた店はどうも繁盛するようだ」東北の町々に風評が立った。（中略）

町々の人は少年を歓迎し始めた。少年の姿を見ると目出度いと言って急いで羽織袴で恭しく出迎えるような商家の主人もあった」[18]。

「～らしい」が流布され、「～となる」との断定に変わり、仙台四郎は「福子」化していく様子が小説家の目で描かれている。「繁盛するらしい」が「繁盛する」と伝播されていくのである。「みんなと違う言動をする」仙台四郎に対して世間のみかたとして、彼を次第に「聖化」していくことになる。

そして、彼の写真やそのさまざまな複製の伝播が彼を実在した「異人」として「聖化」していったのである。「仙台四郎が立ち寄ったお店は必ず繁盛する」伝承が重層的に強化されていったのであろう。

仙台四郎の写真や肖像画が売り物としてだれでもが購入できたことは、「聖化」に大きな意味をもたらしたことは看過できない。

清水大慈によると、この点も含め仙台四郎がもてはやされたのは、次の5つの理由としている[19]。

- ① 四郎の写真が流布したのは大正6年の千葉写真館による絵葉書の販売からとされている。明治時代には写真は「盛り場の娯楽」または「見世物」としての位置を占めており、グロテスクさをもっていた。
- ② 四郎に関する伝承からは、共同体の秩序や空間的な領域からはみ出した「異人」としての四郎の姿を見出すことができる。障害を持って生まれたため、徘徊、遍歴を余儀なくされ、人々に蔑まれる四郎。逆に、娯妓に衣服を与えられたり、町の人々に食べ物を与えられる四郎、などもそれである。
- ③ 四郎が知的障害ゆえに人間を越えた能力を持ち、商売繁盛や福をもたらす存在とみなされたことは、「フクゴ」の在り方に非常に似ている。しかし、四郎は一般的なフクゴのよう

に、生まれた家で大切に育てられていたわけではない。家ではなく、共同体全体に大切に扱われたという点では「福の神」という言葉が四郎の姿にもっとも近いように思われる。

- ④ ある飲食店の女性経営者によれば、四郎が入った店はその日から1週間ものすごく忙しくなる。1週間はとにかくどんな店でも繁盛する。その後は、四郎が本当に好きな人の店ではないと、人気落ちていく。欲深い人や、意地が悪い人は四郎に見抜かれている。「なんだ四郎うるさい子だ」と追い返す店でも、その店の人が本当によい人であるならば、四郎が無理矢理入ってくる店もあったという。また、飲み屋の40代くらいの女性は、四郎の性器が人並み以上で、しかも着物の前がはだけでも気にすることがなかったから、娼妓たちがついてまわった。だから、四郎が花柳界の人々に人気があったという話をしてくれた。
- ⑤ 「四郎ブーム」は平成5年以前に4回ほどあり、いずれも不景気の時期だという。1回目は明治15年、2回目は大正7年、3回目は昭和10年、そして4回目は昭和61年の商店街による「福の神・仙台四郎まつり」である。

以上の分析や彼のライフヒストリーからみると、「両性具有的な面をもって育てられ、いったん死の世界に赴いて、川から再生してきた。託宣を伴いながら各地を巡行して、『乞食』として遇せられ、異人視される。後天性の障害をもつ故に神化、「福の神」としての流行神化するが、噂、口伝えによって世間話の主人公に位置づけられている」との宮田登の指摘は首肯せざるをえない[20]。

男と女、生と死、再生、了解しにくい言動、幸せを招く口伝えなどいずれも境界にいる存在であり、「異人」の要素を備えているのが仙台四郎である。空間的、時間的に一時期にせよ「境界」にいたことも証左ととらえられるであろう。

社会集団の多くの成員とのあいだの差異が、異人化の端緒となる。障害児には、日常生活の時間的流れに沿えない動きがある。時間的流れ自体、一人ひとりの固有性をもっている。社会集団全体の時間的流れからみれば、「異なる」言動は奇異であり、「なにかあるのではないか」とうたがう存在として注視される。仙台四郎の生涯から読みとれることは、時代、社会、自然のおちつきのなさに関連している点である。江戸時代から明治時代への大きな変化、そして不況、天災（彼の生涯のあいだに水害、冷害、大火が続いていた）、コレラの大流行など世情的にも不安な状況に生きていたのが仙台四郎である。不安な社会では、人々はしあわせを念願する。しあわせの一つとして福の神を信仰的に求めていくことになる。それが、「福子」としての「聖化」された仙台四郎である。景気が悪くなるたびに仙台四郎は脚光を浴びる。彼の写真や絵を店内に飾っておくと商売繁盛になると「いわれている」。写真や絵によって、人が神に祀られる風習のひとつととらえることができる。

仙台四郎には、「異人は領土の秩序の潜在的汚染物質であり、同時に潜在的活力源である」の「潜在的活力源」が世間にとっての仙台四郎だったのである [21]。

不安な時代状況のなかで、かれは「ホッ」とする存在としてみなされていたのであろう。

なお、本稿において今日の人権意識に照らせば不当、不適切と判断される歴史的表現がある。ある表現が蔑視的・差別的であるかどうかは、その語句の存否によるのではなく、具体的な文脈に即して読まれる必要があると考える。

また、近年「障害」の「害」を使わずに「障がい」と表記することも増えてきている。筆者はそのことを十分理解したうえで、本稿では、「障害」を使用していることをお断りしておきたい。

【注】

- [1] 戎光祥出版編集部編『図説七福神』戎光祥出版 2002 p74
- [2] 井上俊ほか編『現代社会学 第3巻』岩波書店 1996 p175
- [3] 同上 p176
- [4] 同上 p177-178
- [5] 小松和彦編『日本人の異界観』せりか書房 2006 p12
- [6] 新村拓『死と病と看護の社会史』法政大学出版会 1989 p70
- [7] 柳田国男「たくらた考」(1940)『柳田国男全集 第7巻』筑摩書房 1990 p376
- [8] 高田十郎『随筆民話』桑名文星堂 1943 p160-161
- [9] 柳田国男の本棚第13巻『随筆民話』大空社 1979 p16
- [10] 大野智也、芝正夫『福子の伝承』堺屋図書 1983 p40
- [11] 同上
- [12] 坪郷康「障害児観『福子』の伝承」山口女子大学研究報告 9号 1983
- [13] 小松和彦『福の神と貧乏神』筑摩書房 1998 p167
- [14] 同上
- [15] 同上 p39
- [16] 同上
- [17] 同上 p173
- [18] 岡本かの子『岡本かの子集』筑摩書房 2009 p97-99
- [19] 清水大慈「社会的弱者の聖化の研究」『日本民俗学』217号 1999
- [20] 前掲書 『図説七福神』P78
- [21] 前掲書 井上俊ほか編 p188

【参考文献】

- [1] 小松和彦『福の神と貧乏神』筑摩書房 1989
- [2] 小松和彦『異界を覗く』洋泉社 1995
- [3] 小松和彦編『日本人の異界観』せりか書房 2006
- [4] 大島健彦『疫神と福神』三称井書房 2008
- [5] 柳田国男『柳田国男全集 第7巻』筑摩書房 1990
- [6] 岡本かの子『岡本かの子集』筑摩書房 2009

“Sanctification” of the handicapped child

–Thought– of Fukuko

Joji Aizawa

Department of Social Rehabilitation
Faculty of Rehabilitation
Kobe Gakuin University

There is tradition to raise a handicapped child calling himself Fukuko, Fukumushi, Fukusuke, Takarako carefully. I discuss it while associating the process when sanctification performs of a handicapped child from a viewpoint of the social welfare with the social situation in this report. Particularly, I analyze the handicapped child as Izin while being based on a precedent study and consider outlook on handicapped child for Sendai Shiro as a concrete instance.

Key Words : Fukuko, tradition, Izin, handicapped child, Sendai Shiro